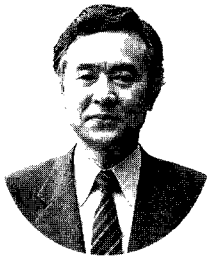


所報

No. 218
昭和63年6月

広島市教育センター

M. Kamigochi



カウンセリング・マインド

「いじめ」「登校拒否」など、子どもの問題行動をめぐって、子どもの内面に迫る指導が強調されるなかで、わたしたち教育に携わる者の中で、「カウンセリング・マインド」ということばがよく口にされております。

「カウンセリング・マインド」は counseling と mind とを結んで作られた和製英語だといわれていますが、それぞれのことばから推測される意味は、さしずめ、「カウンセリングの心を生かした態度」ということになるでしょう。

これは、ずいぶん以前の話ですが、生徒指導担当者の研究協議会を開いた時のことです。助言者として出席いただいていたF教授の講話の後、進行役であった私は、型どおりのことばを添えて出席者の質問や意見を求めました。当然ながら、すぐには反応はありません。その時の私には10秒間の沈黙に耐えることができませんでした。「何かありませんか」、「どんなことでも結構です」、「どうぞ」など、出席者の発言を促しました。

その時です。F教授は「なぜ、いらいらと

広島市教育センター所長 貞金 明

発言を求めるのですか。少し黙って、待たらどうですか」とわたしの司会ぶりを窘められました。進行役としての当然の促しに水をさすようなF教授の忠告に私は、その時、少々不満を持ちました。しかし、今にして思えば、これは、どういう場面であれ、つまり、対象が教師であれ、児童・生徒であれ、また、授業であれ、相談活動であれ、私のなかに相手の反応を性急に求める姿勢が存在することを見抜いての、時を得た助言であったのではないかと受け止めております。

子どもを理解することは、教育において最も大切なことであります。子どもをよく理解することにより、一人ひとりの子どものどこを生かし、どのように伸ばすべきかが明らかになるからです。

ところが、子どもを本当に理解することはなんと難しいことでありましょう。

子どもを目の前にすると、あの手、この手を使って子どもの内側を性急に探りだそうとする気負いが生まれます。カウンセリング・マインドとは、一つにもっと虚心坦懐に子どもの自発・内発を待つ心ではないでしょうか。

共同研究紹介

広島市教育センターでは当面する緊要な教育課題をとらえ、研究協力員の先生方の協力を得ながら共同研究を行っています。今回は「自己教育力」に関する共同研究の概要を紹介します。

子どもたちの自己教育力育成をめざした家庭や地域社会との連携方策

この研究は、自己教育力と家庭や地域社会における子どもたちの諸体験との関連を分析・考察し、そこから自己教育力を育成する学校教育の方向をまとめるとともに、具体的な実践事例をもとに、自己教育力の土台となる家庭や地域社会における諸体験の拡大方策を探ろうとしたものである。

子」と呼ばれる今の子どもたちが、現在以上に急激な変化の予測される21世紀の社会をたくましく生き抜いていけるだろうかという危機感がある。

この研究では、自己教育力を「他とのかかわりの中で自己の成長を図りながら、たくましく生きていく力」ととらえ、その行動条件として、「自発」「自力」「自主」「自律」「自信」「自活」を設定した。図1は、自己教育力の行動条件と子どもの具体的な行動の姿をまとめたものである。

自己教育力とは

今日、学校教育に自己教育力の育成が求められる背景には、「心身ともにひ弱い現代っ

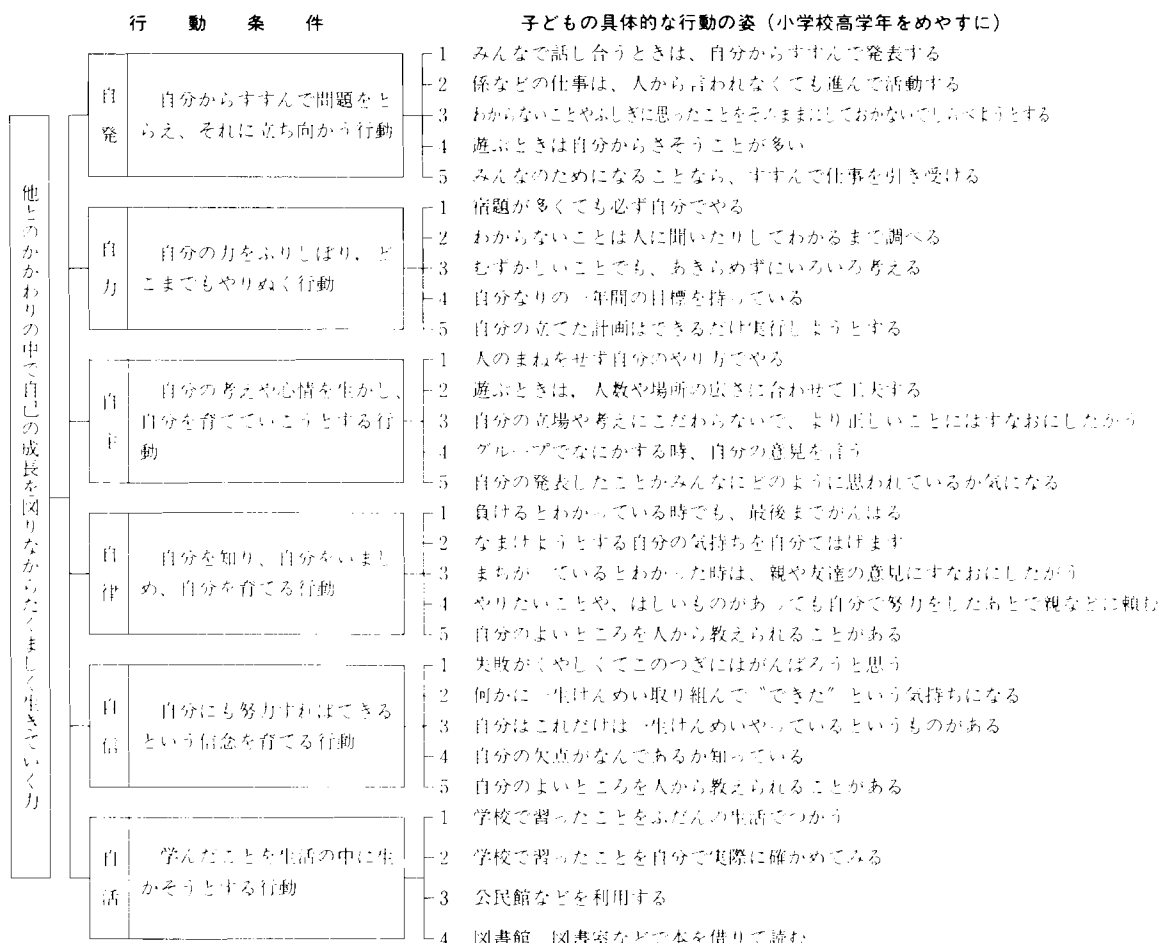


図1 自己教育力と子どもの具体的な行動の姿

以上のように、自己教育力は六つの行動条件で構成されている。その中核には自発、自力があり、次の層には、自発、自力を支え、推進するものとして自主、自律、自信がある。そして、最後に自活ということになるだろう。これらの中では、おそらく自発、自力を重点として取り組むことになるであろう。

自己教育力の土台となる家庭や地域社会における諸体験

人間性豊かな子どもを育てるための少年期の発達課題は「活動性」ということにある。人間的総合力である自己教育力の育成においても、少年期の発達課題「活動性」の適時達成を抜きにしては考えられない。この点を考慮に入れながら、子どもたちの自己教育力の土台となる家庭や地域社会における諸体験を次のように考えた。

- ・ 人間関係体験 ・ 自然体験 ・ 社会体験
- ・ 基本的な生活習慣、自主的な生活態度
- ・ 親との対話 ・ 親の自己教育力

図2は、子どもたちが確かな自己教育力の土台を築くために必要と思われる家庭や地域社会における諸体験に、知的経験(間接経験)を加えて構成したものである。

子どもたちはいろいろな体験を幅広く積み重ねる中で、自己教育力の土台となる力を我がものとする。このような状態であれば、知的経験も幅広く豊かな生活体験と結びついてより確かなものになっていく。左側のような安定した三角形の構造こそ、望ましい子どもたちの姿といえる。

ところが、現実には子どもたちの育つ環境の大きな変化の中で、右側の図のように知的経験が肥大化し、逆に色々な体験が乏しくなり、逆三角形のような構造になってしまったのが、今の子どもたちの姿ではなからうか。不安定な逆三角形の倒壊を防ぐには、どうしても大人の指示や管理が必要となる。

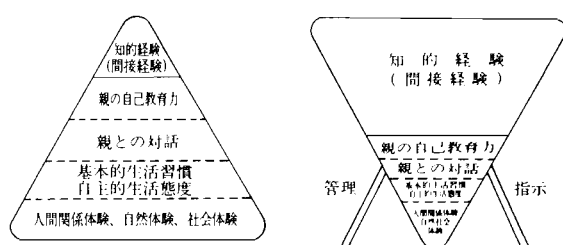


図2 今の子どもたちの姿

自己教育力と家庭や地域社会における諸体験

子どもたちの自己教育力と家庭や地域社会における諸体験との関連を探った。その結果自己教育力は、どの体験ともかなり強い相関があることがわかった。なかでも、自然や社会、人間との心情的なかわり体験は、最も強い相関を示していた。

確かな自己教育力の土台を構築するためには、例えば、涙を流して喜んだり、寝られないほどくやしかったりするような情意を伴った自然や社会、人間とのかわり体験を子どもたちの世界に取り戻さなければならない。

学校教育の取り組むべき方向

自己教育力の土台となる家庭や地域社会における諸体験を子どもたちの世界に取り戻すことは、決して不可能なことではない。今こそ学校が中心となり、家庭や地域社会を巻き込んだ取り組みを展開しなければならない。

具体的には、次のような取り組みの方向が考えられる。

- I型 積極的に学校の教育活動の中に家庭や地域社会における諸体験を位置づける
- II型 学校が意図的、計画的に家庭に働きかける
- III型 学校が主導権をもちつつ、家庭や地域社会と連携・協力して教育活動をすすめる

研究協力員所属の9小学校でそれぞれの型に基づいた実践研究をすすめ、そこから実践上の手だてを明らかにした。詳細は、広島市教育センター『研究紀要』第8号(昭和63年6月発行)を参照していただきたい。

(「自己教育力」共同研究グループ)

おこたえします

Q

A

＝ 教育相談室から ＝

家庭との連携について

Q 日頃の言動に心配のあるA君（中学生）のことで家庭と連絡をとったり、家庭訪問をしたりしたのですが、本人は嫌がります。どのようにすればよいでしょうか。

A 学校と家庭との連携は、なくてはならないものです。子どもの教育は家庭の協力を得て、より一層効果が上がります。しかし、無理をして教育的効果を損ねては何にもなりません。そこで、A君が嫌がる理由を考えてみましょう。

○ 一方的な指導や助言

例えば、先生がA君の家庭でのしつけの仕方や接し方に問題を感じ、それについて、家族にもっとA君の言動に注意をするよう、いろいろ要求したり指導したりすることがあります。

家族は、それまでA君のことを放っていたとは限らず、A君のことを考え、努力していることもあり、そのうえ、先生から「ああしてください」「こうしてください」と言われると、ますます負担に感じる場合があります。また、先生の助言が家庭の事情や状況によって、うまくあてはまらない場合には、家族はどうしてよいかわからなくなることもあります。

○ 外見的な事実の報告

または、学校での出来事やA君の行為をそのまま、「学校では、こうでした」「今日は、こんなことをしました」と報告する場合があります。

その報告がよいことならいいのですが、得てして悪いことの方が優先しがちになり

ます。子どものことを思っただけの報告ですが、それを聞く家族は、学校での出来事に対してどうしてよいかわからず、ただ先生に「申し訳ありません」「すみません」としか言いようのないことも多くみられます。

これらの結果、家族の不安や困惑の矛先はA君に向けられ、それがたび重なるに従って、A君は先生に対して反発感、拒否感を感じるようになってきたと考えられます。

このように、先生の関わり方によって、家族に心理的な動揺が見られ、それがA君に影響していることも考えられます。

◎ 以上のことは、家庭とのコミュニケーションが不足している時によく起こります。

○ 信頼関係の形成

問題が起きた時の訪問や連絡はしにくいものです。よいことの報告は、教師にとっても家族にとってもうれしいことであり、相互に心打ち解けて話し合える契機となるものです。日頃からこうした機会を通して十分な信頼関係をつくっておくことが大切です。

○ 指導より理解

子どもの示す問題行動は、家庭の事情や人間関係などが複雑に絡んで現れてきたものです。まず、それを十分に理解することが大切です。そのためには、それを指摘するだけの指導ではなく、家庭での様子等をよく聞く姿勢が求められます。

○ 親と教師は同じ立場

親はややもすると弱い立場に立ちやすいものです。家庭の悩みを親身になって受け止め、家庭と学校とが共に考え、解決していくことが大切です。

広島市教育センター指導主事 長谷川 尚徹

共同研究紹介

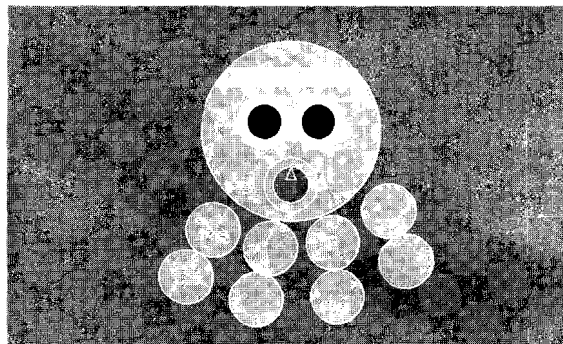
マイクロコンピュータ教育利用に関する研究

広島市教育センターでは、高度情報化社会に対応した教育の進め方を探るために、研究プロジェクトチームを組織し、コンピュータ教育利用の在り方についての基礎的な研究を行ってきました。このたび、第2年次の研究がまとまりましたので、その概要を紹介いたします。

第2年次の研究にあたっては、第1年次の研究成果をふまえ、「コンピュータが授業へどのように利用できるのか」を視点として、校種別に研究主題を設定して取り組んだ。

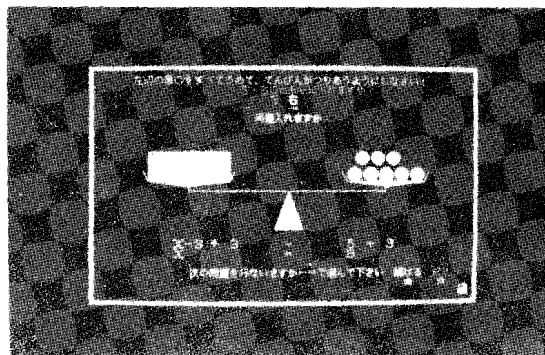
小学校 「コンピュータに慣れ親しませるためのLOGOの指導」

小学生をコンピュータに慣れ親しませるためには、教科指導にコンピュータを取り入れ、教具として用いる方法のほか、コンピュータに自分のかきたい絵や図形をかかせ、ゲーム的に利用する方法がある。この研究では4年生から6年生の児童にLOGO（ロゴ）という図形作成ソフトで、自分のかきたい図形をプログラミングさせ、その作成過程でコンピュータの仕組みや機能、操作法がどの程度理解できるようになったか、また、プログラミングについてどの程度習得できたかを実証的にとらえようとした。指導にあたっては、7時間の指導計画を作成し、授業を行った。写真は6年生の児童の作品であるが、児童のコンピュータに対する興味・関心は大変高いことが示された。



中学校 「授業へのコンピュータ利用」

数学、理科の学習を中心に、コンピュータの利用形態とその効果的活用を図るためのコースウェアの作成を行った。授業へコンピュータを利用するためには、良質な学習ソフトが必要であり、このソフトには学習者が主体的に学習に取り組むことができるように学習内容がきめ細かく検討されていなければならない。写真は、数学の1次方程式の「等式の性質」をコンピュータによってシミュレートさせ、等式の成り立ちを理解させようとしたものである。このような良質な学習ソフトを用いた授業の効果は大変高く、生徒が主体的に学習する授業となった。



高等学校 「コンピュータの授業への位置づけ」「情報処理ソフトの利用」

高等学校では、授業へのコンピュータの利用及びCMI的利用について研究を行った。

授業への利用については、フレームの作成を中心に数学、理科の学習ソフトを開発した。CMI的な利用では、主として図書整理の在り方を取り上げ、コンピュータを利用したデータの入力と検索法を工夫した。

教育センターひろば

教員特別研修生

今年度前期は次の5名の先生方が、それぞれの専門分野で研修を進めておられます。

☆国語科教育：山下美保教諭（江波中）

研修題目：豊かに読み味わう力を育てる文学教材の指導

☆社会科教育：淀瀬俊二教諭（深川小）

研修題目：作業学習を取り入れ、理解を深める社会科学習指導法の研究

☆算数科教育：木村恵子教諭（戸坂小）

研修題目：問題づくりを取り入れた算数科学習指導法の研究

☆図画工作科教育：吉元洋子教諭（伴小）

研修題目：図画工作科において主体的に表現に取り組ませるための鑑賞指導とその評価

☆家庭科教育：小坂三千子教諭（日浦小）

研修題目：児童の主体的活動を高める家庭科指導法の研究

人事異動

☆離退任

～ 在任中はお世話になりました ～

植田保之所長（郷土資料館長へ）

木本寿直主任指導主事（落合東小教頭へ）

坂本武美指導主事（退職）

清水孝一教育相談員（退職）

三浦徳光研修指導員（退職）

☆就任

～ どうぞよろしく ～

貞金明所長（市教委事務局から）

松浦克行指導主事（こども文化科学館から）

佐々木尚美指導主事（安西幼稚園から）

石原幸江教育相談員（前己斐東小学校長）

中田昭吾研修指導員（前大町小学校長）

職員・分掌

| 部 | 事業等 | 職名 | 氏名 | 担当業務 |
|-------|-----------------|--|--|--|
| | | 所長 次長 | 貞金 明 原田 力 | 所務総括 所務管理・執行 |
| 管理部 | 庶務・経理 | 主任 主事 主事 | 芋里川孝行 来海谷基子 服部和之 | 部内総括、施設設備の維持・管理 公印、給与、文書処理、経理等 予算、決算、経理等 |
| 第一研修部 | 教育相談・広報 | 主任指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 教育相談員 教育相談員 | 橋本 郁 宮河 治 升尾好博 長谷川尚徹 松田了二 佐々木尚美 奥田丸豊生 藤原野吉正 山中隆治 石原幸江 | 部内総括、生徒指導、教育相談 障害児教育、教育相談 特別活動、同和教育 生徒指導、教育相談 学校教育史編さん、特別活動 幼稚園教育 教育相談 教育相談 教育相談 |
| 第二研修部 | 研究・資料整備 教育関係 | 主任指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 研修指導員 図書資料室嘱託 | 福原純治郎 早川 慧 民安和昭 松浦克行 財津伸子 中田昭吾 田平久恵 | 部内総括、外国語・英語科 社会科、道徳 算数科、数学科 教育工学、視聴覚教育 国語科 教育工学、視聴覚教育 図書資料関係事務 |
| 第三研修部 | 研修 | 主任指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 指導主事 研修指導員 研修指導員 | 中村道徳 竹本建治 西川勝士 西村達男 越智文嗣 温田家弘 加藤良明 | 部内総括、企画、家庭科、技術・家庭科 音楽科 理科 図画工作科、美術科 理科 理科 家庭科、技術・家庭科 |

（兼）は兼務

表紙絵 広島市立広瀬小学校長 上河内昌己

～原爆ドーム～

題字 広島市立口田中学校長 多川 清和

編集後記

本年度最初の所報をお届けします。今回は「自己教育力の育成」と「マイクロコンピュータ教育利用」についての教育研究を特集しました。御活用ください。